

挨拶

謝 辞

2020年度功労者表彰

被表彰者代表

浅 見 正 弘*



この度、功労者として表彰いただくことになり、大変名誉に感じますとともに、何よりもJIPAでお世話になった皆様に深く感謝を申し上げます。まことに有難うございます。多くの素晴らしいご業績を残してこられた今回の受賞者の皆様を差し置いて、まことに僭越ではございますが、代表として謝辞を述べさせていただきます。

私自身のJIPAでの活動といたしましては、2017年度に副会長を拝命し、翌2018年度に理事長を務めさせていただきました。知財部門での経験も浅く、R&Dや事業を含めた企業経営全般の視点から知財戦略を考え、何とかJIPAの活動に貢献したいと取り組んでまいりましたが、実のところは周囲の皆様にご助けをいただくことばかりでしたので、功労者表彰はまさに汗顔の至りであります。

当時の状況を振り返りますと、ドイツで始まったIndustrie 4.0の話題が日本でも沸騰し、IoT、Big Data、AIなどのバズワードもネットやメディア上にあふれ、それを受けて産業界はどう対応するのか、ビジネスの変化は知的財産の保護や活用はどう影響していくのか、そうした課題に取り組むことがJIPAにも強く求められていたことを思い出します。実際に、第16回シンポジウム（2017年）では「ビジネス革新と変容する知財活動」と題してIoT、Big Data、AIが与えるインパクトを議論し、第17回シンポジウム（2018年）では「IoTでつながるビジネス」と題して先進IT企業を集めたパネル討論を行いました。そうした社会環境変化の中で、JIPAでは「経営に資する知財活動」を目指して様々な活動を行いました。人材育成面では、企業の経営課題としての知財課題を明確化し、経営に戦略提案する力の醸成を重要な視点として位置付け、特に、知財人材として産業構造の変革を俯瞰したビジネス展望に基づいた包括的な知財戦略を策定する能力の育成に力を入れました。

また、理事長として務めた2018年度には官・学を中心に特許法、意匠法改正の動きが加速し、産業界では懲罰的賠償制度と二段階訴訟制度の成立に対する危機感が高まりました。これに対して、JIPAでは知財活性化プロジェクト、次世代コンテンツ政策プロジェクトを中心に会員企業の意見集約と議論をお願いし、強い懸念意見を発信するなど、両制度の見送りに寄与できたと思います。

これらの様々な活動も皆様のご支援があればこそでした。改めて深く感謝を申し上げたいと思います。産業界ではその後もデジタル変革への要請が高まり、新たな知財課題に向けてJIPAの役割もますます重要になっていると日々実感しております。私自身も今後とも微力ながらお役に立てる場面では力を尽くす所存です。最後に、これからのJIPAの活動のますますの発展と産業界への貢献を祈念いたしましてお礼の言葉とさせていただきます。本当に有難うございました。* 前 富士フイルム株式会社